

式、饗宴、グロテスクな肉体のイメージの背景についてなどを理解する重大な手立てだった。宮下志明さんが「ガルガンチュア」の新訳をなさって、おおいに興味をひかれ読んだ。バフチーンが問題にしたラブレールの意図をみることにとらえた、すばらしい訳だ。

6 (規則違反だともうひとつ、どっつしても) Maurice Sendak & Tony Kushner. *BRUN. DIBAR. MDC Books/Hyperion, 2003.*

*BRUN/DIBAR* は一九三八年にチェコスロバキアで初演されたオペラを土台にしている絵本である。そのオペラの物語はアリストパネースの『女の平和』を土台にしていた。ブルンデイバルという男は街中でハーディガーディを弾いて金を儲けているが、残忍な心をもった乱暴者だ。ある日、幼い兄妹が病気の母親のために必要な牛乳を求めて、遠くの市場へ駆けていったが、金のない客に牛乳はやれないと牛乳屋に断られた。ふたりは金を集めるために広場で歌ったが、ブルンデイバルのハーディガーディの轟くすごい音にその声はかき消された。賢い犬に、「ブルンデイバルはでかい、あんたたちは小さい。人びとの助けをかりなきや勝てない」と教えられた。一瞬のうちに、多数の動物と子どもたちが集まって、大声で合唱してくれた。金が集まった。ブルンデイバルは懲らしめられた。黄色の「ダビデの星」を服につけた幾人

ものユダヤ人の姿。道路には、例の「労働は自由をもたらす」という語句を書きつけた横断幕。トレイゼンシュタット強制収容所で、ユダヤ人たちはこのオペラを五十回も上演した。「悪人はいかならず負ける」と歌ったかれらは殺人収容所へ連行され、毒ガスで殺されかまどで焼かれた。

大野克嗣

(物理学)

1 L. Suskind and J. Lindesay, *An introduction to black holes: Information and the string theory revolution*, World Scientific Publishing Company, 2005.

熱力学は物理学の革命の際の指針を与える。量子力学革命の時がそうであった。より小さな統計物理や高分子物理での「革命」のときもそうだった。次の革命もそうではないか。本書は熱力学ファンに心地よい本である。本書を理解するにはWald程度の一般相対論の常識が要るが、それがなくても雰囲気は伝わるかも知れない。だが、「物理学の革命」は物理学者にできることなのか？ 昨年はアインシュタインの奇跡の年の百年目を記念して「世界物理年」などといったが、最も認識されるべき点はアインシュタインが当時職業的物理学者でなかったことではないだろうか。

2 J. Diamond, *Collapse: How societies choose to fail or succeed*, Viking Penguin, 2005.

本書は、他にいろいろあるにせよ、人口過剰が諸悪の根源であるということと雄弁に物語る。人文科学系の人は多くこれを副次的であるとするが、人が生き物であることを忘れることを人文科学的誤謬と名づけるべきだろう。

3 D. J. Buller, *Adapting Minds: Evolutionary psychology and the persistent quest for human nature*, The MIT Press, 2005.

だが、人が生き物であることから重要なことがすべて従うとするのも単純にすぎない。本書は生物進化の根本的重要性を認めたくえで、いわゆる進化心理学路線の論理的欠陥と事実誤認を衝いた本で、人間について考えたい人必見の書である。

4 新井仁之「ルベীগ積分講義」(日本評論社、二〇〇三年)

リンカンの履歴書にはユークリッドをどこそまで読んだということが書いてあるそうだが、数学の基本的な考え方を普通の人が知っているというのは文化の健全さの印だろう。本書は測度論からはじまって掛谷問題などを高校レベルからいねいに説明している。入門書だがごまかしは勿論ない。大抵のことを知っている人にも楽しめる本だと思う。

自然科学に近い本ばかりになったが自然科学は現代文化の主要部分である。したがって自然科学者のいわゆる文化的な面への寄与は大切だ。アメリカでは連邦研究費の申請には必ず一般への還元が要求される。日本では、たとえば、こういうところに原稿を依頼されるのは引退したか引退寸前の印だ。このような風潮が少し変わることを願いたい。

斎藤成也

(人類学)

1 矢沢あい『NANA』1〜14巻、集英社、二〇〇〇〜二〇〇五年

日本のコミックスは大島弓子氏の諸作品を頂点とする文学である。NANAは最近の大きな収穫。絵がいいのはもちろんだが、感情の機微のとらえ方がいい。崩壊の予感を常に感じさせるのは現代の象徴か。映画もよかった。

2 岡田英弘『中国文明の歴史』講談社現代新書、二〇〇四年

私淑する岡田先生の書はどれもおもしろい。中国の古代DNA分析にかかわっているの、周辺民族が中華文明を立ち上げたのだという指摘が特に興味深かった。末尾に示された近世の日本からの影響も、現代中国が無視しようとしている歴史の現実なのだろう。

3 V. S. Ramachandran, *A Brief Tour of*

*Human Consciousness*, Pi Press, 2004.

数年前に米国のある会議で初めて著者に会ったとき、「脳の中の幽霊」をほめたら、もうすぐ次の本がでるよと教えてくれた。ケンブリッジの書店で見つけてすぐ読んだ。簡単な実験で脳の精妙な働きを洞察した研究成果が盛りだくさんのすばらしい内容。邦訳あり。

4 B. Cathcart, *The Fly in the Cathedral*, Penguin Books, 2004.

これもケンブリッジの書店で見つけた。二〇世紀前半に活躍した物理学者ラザフォードの研究室がいかにかして原子核の構造を明らかにしていったのかを、アイルランドから来た青年ワルトンを中心に描いた。題名の大聖堂は原子全体を指す。

5 V. M. マンフレディ著、草皆伸子訳『アレクサンドロス大戦記』1〜3巻、徳間書店、二〇〇〇年

数年前に一度読んだのだが、映画に本書のシーンが再現されている気がして、大好きな大王の伝記小説を再読。彼の死後の混乱と分崩を考えると、逆に数百年続いたアケメネス朝ペルシアの偉大さがわかる。

田口善弘

(物理学)

1 ピーター・ラーション、クリステイン・ドナン『スー』(池田比佐子訳、朝日新聞社、

二〇〇五年)

史上最大、最高額の称号を獲得したテイラノサウルス・レックス化石の、発掘者本人の筆になる顛末記。しかし、その中には化石への情熱ばかりではなく、人間の誕生の遙か昔に絶滅した巨大生物の遺骸にまで値段をつけて裁判沙汰にしてしまうアメリカという国の愚かしいシステムへの嘆きも盛りこまれている。半周遅れで彼の国に追従していると云われる東の果ての島国で、同じことが起きることが無いように祈ろう。

2 和田昭允『物理学は越境する』(岩波書店、二〇〇五年)

その同じ愚かしいはずのシステムがヒトゲノムプロジェクトでは見事わが国を出し抜いてしまう。和田という先駆者を、セクト主義と集団主義がつぶしてしまうわが国の様は、学術研究とは実は一筋縄では行かないことをはっきりと映しだす。

3 デイック・テレシ『失われた発見』(林大訳、大月書店、二〇〇五年)

ルネサンスは古代ギリシャの継承だったという虚構がこの本ではあべがれる(実際には、中国やインドの成果も継承)。アジアの世紀と言われるこの世紀の初めになって、やっとこんな本が言い訳の様に出てくるのはいささか惜けない。こういう本は、(日本さへ明日をも知れない身でしかなかった)五〇年前に